

追悼抄



次回は6月10日掲載予定です

夏季五輪・競泳銀メダリスト

やまなか つよし
山中 毅さん

(2月10日、肺炎で死去、78歳)

日本海の荒波から世界へ

1956年メルボルン、60年ローマ、64年東京と、五輪に3大会連続で出場し、競泳で計四つの銀メダルを獲得。戦後日本の象徴的な存在だった古橋広之進さんに続く水泳界のスターとなった。

石川県輪島市で漁師の父と海女の母の間に生まれ、幼い頃から海が遊び場。沖に出た漁船から下り、泳いで陸まで帰ることも。小学校から高校まで同級生だった熊野駿一郎さん(79)は「25メートルを二三かきで泳いだ」と振り返る。日本海の荒波にもまれて培われた泳力は、飛び抜けていた。

高校3年で出場したメルボルン五輪の400メートル、1500メートル自由形で銀、ローマ五輪の400メートル自由形と800メートルリレーでも銀。立ちはだかつたのがライバルのマレー・ロースさん(豪)故人だった。「銀メダルは四つ取ったが、金メダル一つにかなわない」。幾度となく世界記録を更新したが、64年東京五輪は選手と



当時の写真の前でポーズをとる、ロースさん(右)と山中さん(1999年8月、大阪中央区のツイン21で) 八木良樹撮影

してピークを過ぎており、400メートル自由形で6位。金メダルの夢はかなわなかった。

現役時を知る人は、胸板の厚さや脚力の強さ、関節の軟らかさが並はずれていたと口をそろえる。早大水泳部で同期の網川寿夫さん(78)は山中さんに憧れ大学から競泳を始めた。「太ももの周囲は65センチ、肺活量は9000リットルを超えていた。パタ足だけで普通の選手と同じ速さだった」と振り返る。ライバルがいたからこそ奮い立ったという。網川さんは後に、山中さんがロースさんがいたからよかったと話した姿を今も覚えている。

本音でものを言い、上級生の理不尽なしごきに「それはおかしい」と抵抗することもあった。その一方、早大水泳部で同期の梅田肇さん(79)は「僕らの世代のスーパースターなのに、実際に話すときと違う感じがした」と明かす。親しい仲間にはエルビス・プレスリーのものをまねを披露するなど、気取らない一面を見せていた。晩年は心残りもあつたようだが、早大卒業後に留学した米・南カリフォルニア大では最新のトレーニングを経験。妻の正子さん(76)には後に「日本の練習は10年遅れていた。自分も同じ条件で練習していた」と打ち明けたという。ロースさんとは、互いの自宅を行き来するなど生涯にわたって交流が続いた。

引退後は、スイミングスクールの経営を手がけるなど、後進の育成にも尽力した。日本男子が競泳自由形でメダルを取ったのはローマ五輪の山中さんが最後。歴史に残るスイマーは、次の東京五輪で自身を超える選手が現れることを天から願っているに違いない。(東京本社運動部 佐々木 想)